

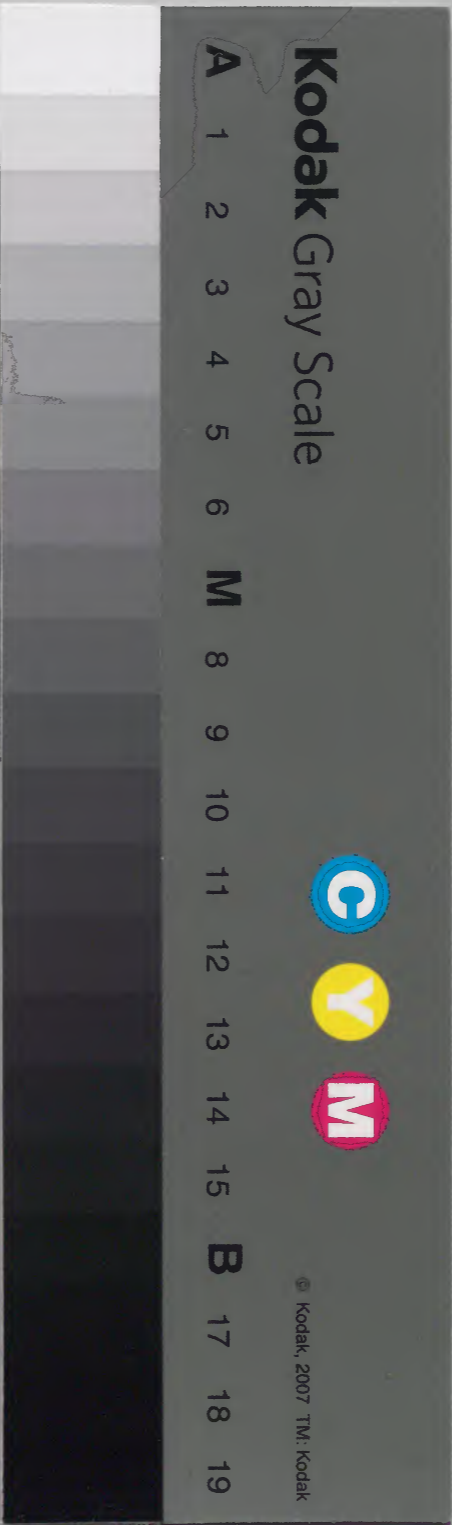
# 羣書類從

二百十八

庫文閣内			和書類
架	冊	號	
二 函	六 六 六	一 八 九 〇	

庫文閣内			和書類
架	冊	號	
二 函	六 六 六	一 八 九 〇	

内閣文庫	
番號	和 18690
冊數	666(280)
函號	215 3



群書類後卷第百十八

和歌部七十三

真鍮和尙自歌合

大比叡十五番

和歌部七十三

客人十五番

三宮十五番

大草部十五番

八

檢校保己一集

小比叡十五番

八十五番

十御師十五番

群書類後卷第二百十八

淺草文庫

檢校保己一集

和歌部七十三 自哥卷三

皇鎮和尚自歌合

大比叡十五番

小比叡十五番

聖王太子十五番

八王子十五番

客人十五番

十禅师十五番

三官十五番

大比叡十五番 日吉社歌合

卷二百十八

一番

を待

あはれもや波ふもあはれすもさし山のあはれ月

右

撰改

いしは鶴ねもやに散花の匂いとすはあつ乃浦に

歌のまらあきりい海はあひ目志もあ玉のまを

とちとあうまもいハ世世ふむ後めあもと女我

國はあはれも後すもい神ちあもあのみもて

あそい後すもい生中もあひいさう

は道をあもいとまうちりく小絶うるい

ちゆもあうてい抄本人麻呂山道赤人後

ちりくちりくい左系業平朝臣花山僧正美

素性法師紀貫之元河内躬恒忠貴等あり

歌のまらあきりい海はあひ目志もあ玉のまを

とちとあうまもいハ世世ふむ後めあもと女我

國はあはれも後すもい神ちあもあのみもて

あそい後すもい生中もあひいさう

は道をあもいとまうちりく小絶うるい

ちゆもあうてい抄本人麻呂山道赤人後

ちりくちりくい左系業平朝臣花山僧正美

のそそあがりまゝくひるひりまをひるくま  
ぬくくつてのおもひもあふぬくくま  
きりくつてせ、既未得謂得未證謂證乃眾  
さうくつてくつて神事といひ證證と  
心ひのうけくつてきんふ初きて寢持のつら  
物平れ尻とあひするまゝくつてあふる  
詞まうせてまゝくつてきんふくつて初光  
同塵のあふまゝくつてくつてくつてくつて  
あふくつてあふくつてあふくつてあふくつて  
書ははらひ左鶴は夏の秋は月光をや

右、鶴は林の春を花白ひをせうあふの  
秋の毛月い運を勝りくつてあふくつて

二番

左勝

あふくつてくつてあふくつてあふくつて

右

あふくつてくつてあふくつてあふくつて  
は右歌いくつてあふくつてあふくつて  
あふくつてあふくつてあふくつてあふくつて  
左方志賀はくつてあふくつてあふくつて

して心ゆくあはれ猶をらまきまへりや侍人

三番

左勝 三春

あきみより春と霞のそつた山もや年をゆくも人

右 月題

やけ山の暮風のそまきしん櫻さきこそゆくも

左にまつたの山れはる霞夜より野山の暮

風とちうさ海も岸のそまきしん題はゆる

を猶左のよはもや年をゆくも侍人

四番

左 山ふくもむあつ花をそく

栄のやう白くむ花はまもあつあつをのそく

右勝 すあはれのち花をそく

釋阿

雲乃乃春もさきしん花がすもあつひて

まはくしん心きうあつあつあつあつあつあつ

の歌是むくしんあつあつあつあつあつあつあつ

をてまう終の侍しんあつあつあつあつあつ

と終の侍あつあつあつあつあつあつあつあつ

とつあ末乃白くあつあつあつあつあつあつあつ

まうらうに侍きたらふもさうなまふくよき  
しゆらうの来ぬ白しら梨はよきしゆらう  
侍むらうのあつもさうはつらう侍

六番

き持 文夜

散らうものもあき木らうなつらう夏夜う

右 卯花

まらうの櫻の枝の雲うつて卯のまきに見をみる  
まらうのさうらうのまらうのまらうのまらうの  
と文夜うつてまらうのまらうのまらうの

と侍の誠におしとあつ侍終右又櫻うさふ  
雲うまて卯花垣の月をみまらうのまらう  
みらうのまらうのまらうのまらうの

六番

き勝 秋の并乃申

まらうの秋のあつ終を思ふまらうの雨路の月

右 同

野へまらうの秋のまらうのまらうの秋のまらう  
左右のまらうのまらうのまらうのまらう  
まらうのまらうのまらうのまらうの

とひ下句の秋のあけ秋のこもりたるをみ  
し海にこそ歌合のうけりおあはれをいひて  
せぬあはれも侍終り早よまはせぬをせり左より  
さきかへりやううおほしけり

七番

左勝 大宮乃し一叙し

照月如光ともてあはれきくをさるる山川の水

右 月あつきよ大嶽をたあはるる

大まけのまきし尾の霧をたてし月のまきぬ  
あまぬく風よ霧をたてしひていふあはれ

きけむちと識くともたう侍る左のき  
光ともてあはれきくをさるる  
うきわたりくお侍る

八番

ちち 月の歌の中は

月うき入あはれあはれなまはるる月を侍る

右 あな

うきわたりくお侍る  
あはれきくをさるる  
あはれきくをさるる



あしひくく侍りし架く持よりくや

九番

左勝 五れくの中ふ

まのひぬき侍たの星の神無月よの葉ゆもあまふ

右 ちる

ち相さゆも山田れはのむく層さくあふ残るあう那

まれく立田るま水神無月よあふふのちる

あまひを侍侍りまあふ葉ゆもあまふあうま今

も侍りもあまふとく人もあふて侍りあまふ

まらたるあまふも侍りも相左あまふあまふ

十番

左勝 ちるくの中ふ

新ぼくまああまふの雲清く月のあふとくあまふ

右 ち鳥

まのうのちるくまののちを我まのあまふあまふ

まをあまふくちるまあまふくあまふあまふ

あまふくあまふくあまふくあまふくあまふく

あまふくあまふくあまふくあまふくあまふく

十一番

左 持 初恋

勝りて人

君が名は藤の葉の心あらんよきまのあひの庭尾

卜右 寄風恋

あはれあひの心もわらへむいふ今も君の庭のまじは

左右并りよきまの心も徳れ初尾人侍名の庭志

まの尾もれまの心もわらへむいふ今も君の庭のまじは

十二番

き勝 述懐

よは申ともいふ心はしるいふ心もわらへむいふ今も君の庭のまじは

右 同

まの尾もれまの心もわらへむいふ今も君の庭のまじは

十二番 西首は述懐の心を勝ともいふ今も君の庭のまじは

まの尾もれまの心もわらへむいふ今も君の庭のまじは

十二番

き勝 無常

あはれあひの心もわらへむいふ今も君の庭のまじは

右 同

まの尾もれまの心もわらへむいふ今も君の庭のまじは

まの尾もれまの心もわらへむいふ今も君の庭のまじは

まの尾もれまの心もわらへむいふ今も君の庭のまじは

まの尾もれまの心もわらへむいふ今も君の庭のまじは

の衣がきりかくるは修多羅とて勝るとも

十四番

を勝 教皇舍利誌

の法にうらむ根小のうらむて後の光也

右 曰

諸人のけりもきりては昔のちもきりて

そのうらむ根小教皇のうらむて右の昔に

下ももつては教皇もきりては侍りては

この後の光也とて侍りては侍りては勝と

十五番

を勝 塵點本

の塵のほりもきりてはあつては一月とて

右 未顕其實

ひは月がりのみりては早は書りては

左は塵點の山右うらむは雲とては勝も教皇

あきりては

あきりては

あきりては

小比叡十六番

卷二百十一

九

一番

右お

わいしんかゝるもつ葉よの雨もあまもつ光のまよふ

古

横政

あまの目もあまの光あまのまよふもあまのまよふ也れ

その歌和光の歌あまのまよふもあまのまよふ右の奇東

方の光あまのまよふもあまのまよふもあまのまよふ也れ

二番

左勝

迷懐

入道教

そはあまのまよふの光あまのまよふもあまのまよふ也れ

古

同

あまの目もあまの光あまのまよふもあまのまよふ也れ

右のまよふもあまの光あまのまよふもあまのまよふ也れ

侍もあまの光あまのまよふもあまのまよふ也れ

三番

春の奇あま

田兒のまよふもあまの光あまのまよふもあまのまよふ也れ

右 同

釋阿

あまの目もあまの光あまのまよふもあまのまよふ也れ

け右の奇あまの光あまのまよふもあまのまよふ也れ

あゝゝゝ一方の傍にのみとわつてふ事あるん  
とてつゝとつと後とつと不事つととと  
やとあつとつとつとつとつとつとつとつと  
あつとつとつとつとつとつとつとつとつと  
つとつとつとつとつとつとつとつとつと  
つとつとつとつとつとつとつとつとつと  
つとつとつとつとつとつとつとつとつと  
つとつとつとつとつとつとつとつとつと

四番

を勝

をの弁の中

右 目

散る空乃ゆの里とつとつとつとつとつと  
左とつとつとつとつとつとつとつとつと  
つとつとつとつとつとつとつとつとつと  
つとつとつとつとつとつとつとつとつと  
つとつとつとつとつとつとつとつとつと

五番

左持

郭と

郭とつとつとつとつとつとつとつとつと  
右 復さる

やとつとつとつとつとつとつとつとつと  
左右両首つとつとつとつとつとつとつと  
つとつとつとつとつとつとつとつとつと

巻三書冊八

十一

六番

左勝

秋の寄は申ふ

身も海もあまひと秋のうはにけはなる一々寄は

右

鹿の寄

むしと付取物なる一々秋のつきとまきとれ

両方あまひと秋のうはにけはなる一々寄は

と秋あまひと秋のうはにけはなる一々寄は

作

七番

左勝

月れ歌の中に

きよき月之光はあまひと秋のうはにけはなる一々寄は

同

うらよす秋はあまひと秋のうはにけはなる一々寄は

左きよき月のせきと右よすのせき取れとあまひ

月の光もあまひと秋のうはにけはなる一々寄は

波のうらよすもあまひと秋のうはにけはなる一々寄は

らよすもあまひと秋のうはにけはなる一々寄は

八番

左勝

秋田

きよきかた店も袖のきよきと秋のうはにけはなる一々寄は

右

秋れ歌の中へ

あはれに尾花のしるしはあはれに月あはれに  
 此両首又さうし甲乙とていふは右尾花  
 かつはあはれに月あはれに月あはれに  
 と志あはれに月あはれに月あはれに  
 さうしとていふは左のすうしとていふは  
 免れしとていふは右のすうしとていふは  
 さうしとていふは右のすうしとていふは

九番

き持 きのすけ  
 月あはれに月あはれに月あはれに  
 月あはれに月あはれに月あはれに

右

霜枯るの鶴のさうし秋のさうし  
 右のさうしとていふは左のさうしとていふは  
 さうしとていふは右のさうしとていふは  
 さうしとていふは右のさうしとていふは

十番

左

寄雲恋

あはれに月あはれに月あはれに月あはれに

右

同

あはれに月あはれに月あはれに月あはれに

左方乃悉くとも甚深なりと勝方なるは  
竹枝と左方ともきこむとわんとして来り  
程もさうりゆり

十一番

左 迷懐

到るかにあはしりては

右 勝 回

而も後よりゆきもむかひにわかれ敷くや我もさる  
南首は迷懐なりはともたぬくゆ程と左の  
すもさるくやゆり

十二番

左 回

草は庵をいひては

右 勝 回

高きも程山里ある息を一つと身よひてさ  
左の奇いひても又いへんさうさ  
まうさあしりては右のみや去る程  
山里のあはしりては  
ともさるゆり太極さるくや

十三番



十一左

やまひよらうしるるあり

あはれきり我らもあはれきりたのしきことらひらひらあはれ

右勝

よきことらひらあはれきりあはれきり

あはれきりあはれきりあはれきりあはれきり

あはれきりあはれきりあはれきりあはれきり

あはれきりあはれきりあはれきりあはれきり

あはれきりあはれきりあはれきりあはれきり

あはれきりあはれきりあはれきりあはれきり

あはれきり

十日書

左勝

月如奇の中

あはれきりあはれきりあはれきりあはれきり

右

九月無動身より教恩誨をこあひ

あはれきりあはれきりあはれきりあはれきり

あはれきりあはれきりあはれきりあはれきり

あはれきりあはれきりあはれきりあはれきり

あはれきりあはれきりあはれきりあはれきり

あはれきりあはれきり

十一書

左勝

金剛界三部をこあひ

今らうの御もあはれしる月あまのあはれの御もあはれの室

菩薩十度をともする中一は智恵波羅蜜

密を

あまのさうきつをやう佛業とせしむるはあはれしる

右のうきまをやう佛とせしむるはあはれしる

たもくは侍もともはた十の夜は月人

あまのやうに

深山のやうに

あまのしるたもくはあはれしる

あまのしる

聖真子十番

一番

左持

九品乃玉如くかの光あつ三の部をたもくはあはれ

右

横政

送くはあはれしる花あつむく人あまの雲

左玉雲光右紫雲色難分と共よ為

神事一勝芳あや侍むくはあはれしる

二番

右持

まゝ人の袖ひをまゝの袖尾のまゝにたてのまゝ

右

我の袖ひをまゝの袖尾のまゝにたてのまゝ

左 濱風右 谷尾のまゝにたてのまゝ

まゝにたてのまゝにたてのまゝ

まゝにたてのまゝ

三番

左

霞

まゝにたてのまゝにたてのまゝ

右勝

橋上霞

かゝりやむらぬまゝのほろ橋をたてのまゝにたてのまゝ

まゝにたてのまゝにたてのまゝ

まゝにたてのまゝにたてのまゝ

まゝにたてのまゝにたてのまゝ

まゝにたてのまゝにたてのまゝ

四番

左勝

花

まゝにたてのまゝにたてのまゝ

右

同

あまのこゝろに計りかゝるはあまのちかき雲のまはるる  
左右の花右のこゝろあはれ白おろくとももよほり  
のまゝあはれゆるりもあはれ侍りそ左の  
たのびもたのびもこゝろあはれゆるり  
まゝもゆるりもあはれゆるり左のまゝゆるり

六番

左勝 五月ぬ

山里如雲よはあまのちかき雲のまはるる

古 夏のゆるり

釋阿

あひくる花たちもれの袖あふ流はゆきあふる秋のま  
は右の七首のゆるりゆるり是のゆるりゆるり  
ゆるりゆるりゆるりゆるりゆるりゆるりゆるり  
ゆるりゆるりゆるりゆるりゆるりゆるりゆるり  
ゆるりゆるりゆるりゆるりゆるりゆるりゆるり  
可右勝

六番

左勝 七夕

あはれゆるりゆるりゆるりゆるりゆるりゆるりゆるり  
ゆるりゆるりゆるりゆるりゆるりゆるりゆるりゆるり

右 月

卷三十一

十七

あつく小やまのうらと物もひう秋の七日の初あひのま  
あ首七夕まじうと詞もまたえんふゆかを左の  
末の句とにたりはまらうととやゆと

七番

右勝 古仁鹿

白きと庭のあまゝぬるまのうら野の掉鹿の声

右 秋の歌は申す

うらうらとまら野のまらゆあゆまきまを  
まら右の秋争もまらまらとあうくうくま  
ゆまをばまらまらとあうくうくま

八番

十番 月のうら申す

あつ明の月ゆかゝるはあつてうの寺のあつ国へ

右勝 同

あつとまらまらとあつて月まらまらとあつて  
あ首あつとあつての月又まらまらとあつて  
と右の月いたまらまらとあつて明のまらまらと  
まらまらとあつてと右の寺勝るまらまら

九番

右勝 同

あつきの如漏やまはたかみ人袖もあらうか徳のまを

右勝 同

と山木のあつきのまを指さく程さくまのあつきの

左歌の詞幽玄の風神に但右奇のあつきの

そらもといひ程さくまのあつきの

そらもといひ程さくまのあつきの

十番

左 後朝恋

あつきの如漏やまはたかみ人袖もあらうか徳のまを

右勝 曉恋

あつきの如漏やまはたかみ人袖もあらうか徳のまを

両首の恋れまを詞言勝者ハ侍るを右の

袖もあらうか徳のまを

まはたかみ人袖もあらうか徳のまを

十番

左持 迷懐

あつきの如漏やまはたかみ人袖もあらうか徳のまを

右 同

あつきの如漏やまはたかみ人袖もあらうか徳のまを

左の月右の月明もにのちうくく勝若  
難分同科也すす

十二番

左持 無常

とるし(中)もは煙のまいたるのあふはひん  
右 同行よあまひる人今ちほくきさる

くあうりく終ちあひひん

古きもはひるあふはひん  
左右の平のまいたる又あふ科もあふ

十三番

十左 七宝かくれ給ふて雲林院よ後のまき

あふしてあふてのち

かふしを雲の林よあふはひん液のあふはひん

右勝 田周忌の日御もふまひん

あふはひんあふはひんあふはひんあふはひん

左雲の林よ液の雨あふはひんあふはひん

く侍るし右あふはひんあふはひん

あふはひんあふはひんあふはひん

十四番

左持 秋のあふ故月あふはひんあふはひん

念佛おこるひくろり

山は神の紅葉のふりこきむらさきさき秋の清小

右 勸性法橋うき終てのち西山禅生院

うき如法経行きんとてまう入る

くろり

たつ入我たもよの露おらて昔の河に秋夜を吹

両首たむらさきさきあきさきあき

右のむらさきのあきさき秋夜もよのあきさき

ゆる勝芳さきさき

十五番

たつ入我たもよの露おらて昔の河に秋夜を吹

左お 金剛界六部の中小蓮花部を

雲乃か引光れ迫りか止字乃蓮れむゆさきさき

右 妙法蓮花部

くろりあきさきの法をいりて此花もよのあきさき

左乃きさきさきの字右の妙法蓮花勝芳さきさき

ゆるさきさきさきさきさきさき

いふふあきさきさきさきさき

うきさきさきさきさきさき

くろりさきさき

久雅願西去之蓮轉可雷東湖之初故云



八王子十の番

一番

尤持

山河の唐名もまはるも唐国トちかてあつたまはる

右 横政

格とつて梅も花も咲ぬる神のまはる春の神を

左尋子半の誓願の山もあつたまはる

車かう右尋神のまはる春の神も又の

常一息よみく思ふくあつた侍ると神事

おつくひ思わく勝者あつた侍ると

二番

左勝

をくまへくひがけあつたまはる神河を昨日くま

右

秘もいふやまはる神もひてくまはる法の燈

は両首あつたまはるあつたまはる

あつたまはるあつたまはる歌合の判もあつたまはる

難せはるあつたまはるあつたまはる申者ハア

ゆきしとらきけ不構護無謂事之右歌

の心又思老心新やあつたまはるあつたまはる

つらよもままよふ十の道のあはれなり  
但きれ海あやしきとゆる未の向ふ  
さほいゝとれあはれと勝なり

三番

左勝 春乃あふ大乗院より人の心  
みせくわねまののちまのちまのちまのちま

右

春の争の申ふ  
あちるる花の書尾より山あえくす  
左乃あはれ山右の志望の里人とあり  
り申れり争の申ふ

四番

侍よあはれ

左勝

春乃あはれ

空もあも部門のあはれ

右

春乃あはれ

あまのこをや霞の袖より  
春よあはれ  
し海よあはれ  
うすもらん浪は馳全の山あも  
くやあはれ

五番

左勝

爰秋よききる中に

曇るも如月たる人時をきてと秋ある月をのぞ

右

交夜

あつのおれ敷もいさし郭をみるかたはあつと

左秋月もいさしとつら又あつと

くゆるもや勝もいさし

六番

左勝

月の芽あつと

みるほきのちれきとつらと秋もいさし

右

海邊夕月

あつとみちるを光えあつと

ちれきのちれきとつらと秋のちれき

あつとみちるを光えあつと

あつとみちるを光えあつと

七番

左勝

雁

いふせんとおれ里のあつと

右

秋の芽のちれき

釋河

夕暮の八野への秋月身かまらばくまの源草れさ  
 は右乃奇崇徳院の清贖の百首の中おたり  
 あも又あまのねあまのねあまのね伊勢物語  
 お源草れさあまのねあまのねあまのね  
 あまのねあまのねあまのねあまのね  
 申してゆりしを左乃奇かみの里の月身  
 ちかえん田面の心まきりあまのね  
 な左勝ゆりし

八番

左勝 秋のまきふ  
 む月もくあまのねあまのねあまのね霜のまきふ  
 右 秋霜を  
 まみらるをのまきふあまのねあまのね  
 おまけふをくむ霜もあまのねあまのね  
 を左乃奇くあまのねあまのねあまのね  
 あまのねあまのねあまのねあまのね

九番

左勝 冬は奇の申れ  
 初せ山霜あまのねあまのねあまのねあまのね

右 目

志なきいさのみし祇のまね松霞たなる夏ちあきさ  
いさのみし祇乃き松いさくねくねくね  
を初瀬山乃よきの清をゆらゆら  
見ゆる所のみ海もあきさくくやゆむ  
十番

左勝 寄園恋

人あふ我あふりよと柳ひさし海のせせり  
右 旅意  
東路のよは志祇をさくく都のあやうなるけ

十番 須戸のせせりあふり海もあきさくく  
も所のみ海もあきさくく

左勝 海路

あつむい霞も月もくくあき春と秋よ波の道  
右 目  
あきさくく今も真もあきさくく松の松尾声よる海  
友方の海路心調勝あきさくくゆを左の善  
初霞秋の月波らさくくあきさくくあき  
松心あきさくくあきさくくあきさくく

十二番

左 山家

人か一層の松尾さるふ月志めそそよもる山志奥ふ

右勝 同

岡のへり里あまをさしゆきさく人にんはあつきの尾

たの星の松尾雲の月山あつきの尾

くみゆり右の星乃くまゆめゆりゆき

とくかまゆり人出ありゆきまゆり

ゆきまゆりゆきまゆり

十三番

左持 山里

山崎ささきゆきまゆりのあるゆきまゆりあまゆきまゆり

右 同

山崎ささきゆきまゆりのあるゆきまゆりあまゆきまゆり

二首の山居左ありあつきたる人のあつきたる

右のささきゆきまゆりのあつきたる申あつきたる

と共く毎勝者可高持

十四番

左勝

百首歌は中一

人かみな秋もあつきたるゆきまゆり秋の中ゆきまゆりのあまゆきまゆり

右 無常

あもきふくつうとてくも霞はかきくらの文書あすの照ふの  
左右如両首とてく詞あし多作と左乃  
あし終もあしとてくまの海とてくふらるるるる  
るるや作るるる

十番

左持 の念不空遇

をささくじるもまもあまふくはあまふくはあまふく  
右 内秘菩薩行  
ふくの鹿あしはあまふくあまふくの月あまふく

左 念不空と右内秘菩薩行紫雲心月詞

あせれくもあまふく勝芳あまふくあまふくあまふく  
あまふくあまふくあまふくあまふくあまふくあまふく  
あまふくあまふくあまふくあまふくあまふくあまふく

客人十五番

一番

左

あまふくあまふくあまふくあまふくあまふくあまふく

右勝 撰改

あはれ光をわもてゆるみあいの白根や雪のちり  
も右もふらうらね雪ふらうせそ弘拓言のふらき  
あうれうらうらね右のあはれ白根や雪  
のちりふらうらねうらうらねやゆらね

二番

左

数うぬふくさすてはくさう塵は浦の光をれ

右勝

ふらき風といそ水山よを海一昔はうらね

三番

左

右歌心尚弘拓言うらね山古風定所はゆらね

とくくや

花の弁あまうらねる中一ふ

右勝 因

や如山雲乃思祿うらね花はうせうあはれ流の白と  
あ首吉野山左雲うらうらねうらねうらね  
れうらねうらねうらねの思根うらねうらね  
うらねうらねうらねうらねうらねうらね



やゆん

四番

右勝 同

松尾小まの秋ハ花ゆふの

右

花さうの霜も時雨も雲霧も

左并 何おほくつく心ありまゆゆ

ありまゆゆ物よゆ山家秋を桂の月

松尾小ま吹をうきまゆ

身をまらるるゆらとをゆきまらるる春

五番

乃尾いやはら

左持 友持并の中

雲まらるる夕小秋をさるる乃尾

右 同

夕小秋野は小友松志水糸秋

右夕小あき成志のあき

夕小右又野は小友松志水糸

翻てきつものを勝と

六番

左 待月賦山

いとはし山乃もれき波ちふもよこして月乃いつるもの

右勝 月如歌乃申ふ

ゆえりてれらる討も色さう雲の夜をうま月うけ

左すくても月のあよりかきさうこえんふ

あうゆるゆえも右雲如歌うすもらるゆれ

うらやゆるぬ

七番

左勝 種弄如申に

夜半ふたういやゆゆきちうして胡弄方うをゆれ

右 目

ちを初らうも霧ふらう色ぬきゆり雲の秋乃書

頃乃実奈とらう折よつきとらう

ぬきも秋の夕多種あひぬを左

小山田乃あひやの標をらう人胡弄方

不しやゆるむ程うちとくや

此間闕

九番

左 雲如歌乃申ふ

庭如雲ふ我あははるえ出つるをこしれらうと入るん

右勝 因

今朝多し雲もつるも浦の雲も霞も  
右こそもさうなるといふもわづらひ  
つものも浦の雲の雲もあらも  
かちちちちちちちちちちちちちちち

十番

左勝

恋の歌は申へ  
うちかゝ思ふ心よあはれ  
右 契り恋  
たのしみめたる人の情をさすは

十一番

左持

旅弁

東海やきよき世の月おぼろしく  
右 目

雲川、そゆ月乃ゆ来を思ひも  
両方の膝たのしさをほめる  
清見へ実れ月を思ふ

あもひきりあはれとありけり右らのあま  
もつた月のゆきもあもひきりあはれ  
いづれか

十二番

右 目

をひのふまたお祢とて茶枕ゆきあはれあまをみる

十 右 勝 百首并の中

いづれかのうき世をばかきしとてはるるのあはれ  
あまのうきあもゆきとみしとありけり  
を右らきよあはれとてはるるあまをみる

十 ありけりよきとて末のうあはれけり  
思ひあはれとてはるるのうあはれとてはるる  
あまのうきあもゆきとみしとありけり

十二番

左 迷懐

あまのうきあもゆきとみしとありけり

右 勝 目

せめてはるるあまのうきあもゆきとみしとありけり  
左右の迷懐とてはるるあまのうきあもゆきとみしとありけり  
よれとあはれとてはるるあまのうきあもゆきとみしとありけり

まやまや

十日番

左持 同

さーとあまみまひんどうふんてーふんてふんてあまみまひんて

右 同

法の門かりもまじりあまみまひんてあまみまひんてあまみまひんて

十二番 右三言の山をまじりあまみまひんてあまみまひんて

右法つふらもまじりあまみまひんてあまみまひんて

あまみまひんてあまみまひんてあまみまひんてあまみまひんて

十六番

左持 或住不退地

早如山りまじり法のみらあまみまひんてあまみまひんて

右 金剛界五部の中い金剛部を

たのもーかうきまほ中のるまもまじりあまみまひんてあまみまひんて

両言又勝者あまみまひんて

あまみまひんてあまみまひんてあまみまひんてあまみまひんて

あまみまひんてあまみまひんてあまみまひんてあまみまひんて

十禅師十五番

一衆

一 左持

本の本はちるる風一少影あふ朝日約あふといふ人

右 根政

本のもはらき成照しを光あうくはたよも五明の月

左朝日よのまはるまに切利夫の御付囀

まはるまに御付也右あうくはたよも

あうの月よと朝あうくはたよも勝あ

あうくはたよも

二番

右 右

右 右

我ものむ日吉の急い美山は紫のたもてもさうあや

右 山あうくはたよもあうの駿勢あま

てのあうくはたよもあうの駿勢あま

あうの駿勢あま

あう

いしし昔のあやなまんとあうもあうの物書

は右太は歌もあうの愚義難思し

集くは入のりし柳もあうの物書

勝ああうくはたよもあうの物書

三番

三右勝 花

梢くけ花のよきしつねをせしむるはさうのうらなひさるる

右 同

花のよきしつねのうらなひさるるはさうのうらなひさるる

首の花のよきしつねのうらなひさるるはさうのうらなひさるる

郭ふさく人もれしつねのうらなひさるるはさうのうらなひさるる

まらきく花のよきしつねのうらなひさるるはさうのうらなひさるる

や以右為勝

四番

左のうらなひさるるはさうのうらなひさるるはさうのうらなひさるる

山はたに白ひしつねのうらなひさるるはさうのうらなひさるる

右勝 三月盡

花のよきしつねのうらなひさるるはさうのうらなひさるる

くもくこのうらなひさるるはさうのうらなひさるる

しつねのうらなひさるるはさうのうらなひさるる

五番

左 友は争いの申し

山けや思も水のよきしつねのうらなひさるるはさうのうらなひさるる

右勝 同

友は争いの申し思も水のよきしつねのうらなひさるるはさうのうらなひさるる

左より右へゆく日くし好角のまはりゆく  
ゆるを右のまはりの山にたあせゆく國ゆ。

六番

左お 立秋

もももあひくまはりあまのり秋乃乃乃

右 秋の平らなる申に

人の急あはるは風吹く山尾より秋の夕々秋

南首乃秋尾左のうひ右山尾のく更々

勝おれるりききり

七番

右 月の平の中ふ

秋のよれ月のあはるはくも雲をさらす中絶をわきのい

右勝 回

月うあけ方まむをを物光をさるるまはりあせ

左さらすすきと秋の上尾いさしあは

ゆる光をさるるまはり乃松尾下はりまむ

るるまはりあせ右より左へ可勝

八番

左 持 鹿



山里はあらしきくは鹿のまよはのまよはるまよはる

右

鹿のまよはるまよはるまよはるまよはる山のあかし秋のまよ

あ首の鹿の声左のまよはのまよはるまよはる右に

山のあかしあらしはまよはるまよはる

九番

左

まよはるまよはるまよはるまよはる

まよはるまよはるまよはるまよはる野のまよはるまよはる

右勝

まよはるまよはるまよはるまよはる

十番

まよはる

釋河

月まよはるまよはる川まよはるまよはる

まよはるまよはるまよはるまよはる

まよはるまよはるまよはるまよはる

まよはるまよはるまよはるまよはる

まよはるまよはるまよはるまよはる

まよはるまよはるまよはるまよはる

まよはるまよはるまよはるまよはる

まよはるまよはるまよはるまよはる

まよはるまよはるまよはるまよはる

まよはるまよはるまよはるまよはる

十番

右持 悲

西はきくおーたあまー海に中一のまにのるるる

右 目

さう悲の庭のむら萩うらさく人とまをを秋の夕音

あ首の意左の玉の如朝ふあかーたるるる

をるる書につくあまう人あうらうらうら

あうらうらうら右の秋の秋もあまも秋

あまうらうら又真心深目科也

十一番

右勝 百首の中ふ

首の中高津の宮にあまうらうらうら松尾

右 目

秋風ふらの煙にあまうらうらうらうらうら

右松波のあまうらうらうら松尾あまうらうら

あ申勝竹うら

十二番

左 速懐

思ふはあまうらうらうらうらうらうらうら

右勝 目





かき糸の柄小春風の白ひみきのそみらふ  
 時あつしつらさきあつしつらさきあつしつら  
 うひつらさきあつしつらさきあつしつら  
 竹まじつら月やあつしつらさきあつしつら  
 珠よふの雲よはあつしつらさきあつしつら  
 のくそくきあつしつらさきあつしつら  
 あつしつらさきあつしつらさきあつしつら  
 ようはあつしつらさきあつしつらさきあつしつら  
 しつらさきあつしつらさきあつしつらさきあつしつら  
 六の御年合う歳はあつしつらさきあつしつら

みつらさきあつしつらさきあつしつらさきあつしつら  
 とおもしつらさきあつしつらさきあつしつら  
 さつらさきあつしつらさきあつしつらさきあつしつら  
 ねちまじつらさきあつしつらさきあつしつら  
 大聖文珠の智あつしつらさきあつしつら  
 色は文珠の雲あつしつらさきあつしつら  
 まつらさきあつしつらさきあつしつらさきあつしつら  
 奇合をたつしつらさきあつしつらさきあつしつら  
 御納文侍つらさきあつしつらさきあつしつら  
 もひつらさきあつしつらさきあつしつらさきあつしつら

すゝむとあはれ侍。

うもつてききあつて

みづの月おこし

三宮十番

一番

左勝

三乃山教高法の花まに我らうそをまじは

右

拵政

みる念は終よまじうそをまじはる法の花印

左右法花も獲のつとも勝あふ

きく左楯三の山よりうそをまじはる

あまの魚もや侍

二番

左勝

己つたのむらに社のゆたはきうかても出の道より

右

赤とく我山河乃水よそはの瀬にあまを

左七の社のもたはきうかてもむら

あまの魚もや侍

三番

左 春は并乃中へ

ひきし春のうらなもあきまの如き松よの草の  
ゆり

右勝 同

霞志く松浦の仲ふあきまの如き松よの草の  
ゆり

左き松よの草の如き松よの草の  
ゆり

右右き松よの草の如き松よの草の  
ゆり

をみるも松よの草の如き松よの草の  
ゆり

四番

左勝 花は并の中へ

花は松よ野山のみこの山暮は  
ゆり

右 同

雲は花よれ雲のうらなもあきまの如き松よの草の  
ゆり

両首のうらなもあきまの如き松よの草の  
ゆり

をみるも松よの草の如き松よの草の  
ゆり

春のうらなもあきまの如き松よの草の  
ゆり

五番

左勝 鴨河

鴨のし舟あきまの如き松よの草の  
ゆり

右 家く納涼

宿るやもくじりきまかきん板井の清水色子松尾  
右納涼もいよきかんとあやし侍るを  
左やうら行れ夕紅のそとゆきこ  
あつみより侍る

六番

左 草花

露のしらももきてあつし秋のそと錦さう  
右勝 菊草

ゆめもく野とあつしむらさき草のそとあつし  
左草花秋あつしむらさき草のそとあつし

侍る野とあつしむらさき草のそとあつし  
下ようつとあつしむらさき草のそとあつし  
そ侍る勝とあつしむらさき草のそとあつし

七番

左持 秋のそとあつし

秋の野とあつしむらさき草のそとあつし  
右 月の歌あつし

あつしむらさき草のそとあつし  
左志のや右山のあつしむらさき草のそとあつし  
侍る



八番

右 月の昇り申す

山のふたあへ入ある月を六松のあつたのあつた

右勝 月のあつたるよ三位入道のあつた

とまらぬ月乃まらぬに月落て霜まらぬ庭の面を

左右を音左入ある月の松乃あつたにあつた

まらぬ月乃まらぬに月落て霜まらぬ庭の面を

落霜まらぬある月のまらぬに月落て霜まらぬ庭の面を

九番

左勝 時雨を

霞のまらぬに月落て霜まらぬ庭の面を

右 落葉を

志を結はるる月のまらぬに月落て霜まらぬ庭の面を

月乃まらぬに月落て霜まらぬ庭の面を

待つ但左のあつたに月落て霜まらぬ庭の面を

楯あつたに月落て霜まらぬ庭の面を

十番

左勝 舟恋

のあつたに月落て霜まらぬ庭の面を

右 恋の舟乃申す



右勝 田

かきよはらふまゝのちの若草のよみかたのりさきふりせし  
そ一都のちの月の素も小若も早れ  
うつくし侍のくさねもさ海のつをさるる  
よせんもあふ小若うつくし侍の勝色

十四番

右持 百首の弄乃中ん

春も秋もあふ小若うつくし侍の勝色

右 旅歌志申ふ

釋阿

十二番

友うはあし始う初も長之玉江の月乃あはう初  
あまのひの弄又玉江乃あしをさるる  
とらふ弄はのらうもみゆぬとあひ  
もあつと玉江の月乃あしをさるる  
路へ侍うしを若のちのあえの中若  
と侍うらうあつ初は月乃あしをさるる  
侍はあはるしを侍の例のこはしき  
あしをさるる

十五番

左持 兼是室車

卷三十一

四七

今よりいへばの軍に法の是の心はうやうやありし物を  
右 不承自得

舟の中は一つ心人を思ふものありてあらば程えはら  
左門より下り右舟中又無勝方同科  
侍り

夏よまゝしつもの心もあはさうもく  
かきしはさうしつの中く月

此歌合者判者倭成入各自筆判書之正也  
以信定少納言令書之為七卷今貽去建久初

比後京極攝政為少納言之時予詠歌中撰  
定之二百首但百九為歌合七社各十番番一  
番右等各詠被加番之男令清書之終又  
判者倭成令取詠歌中可撰加七之由相詠  
同撰送之仍每社加番之男大官曰是右二高  
三番右等直子五番右八五子七番右等  
八番右十役師九番右三官十回番右等也  
能書當世第一也予本奇法編之倭假查修  
法樂非國民修在為深能辨法樂社修深  
取於之沙法如也遂之今納七社實教早

後親撰政法性寺及錄又令一首給二宮芳  
 二宮左寺是也又判者每卷與書符一首錄  
 寺志也其後清書院撰錄運送似未及年  
 任天台座主判者入及又保九十集細字  
 到也又其存 上皇令好和歌及給之召仁  
 和寺御室守覺法親王不被詠進百首中  
 存之和字石又予飯傘及七旬之際詠百  
 首法示剩 上皇令撰新古今給之時帝  
 所詠寺被撰入八十餘首現存之人無其例  
 其新古今之後所詠之百首七之度其中

被定勝亦背詠凡仍者申請而重清書中細  
 神殿者也三十餘年之後兼久三年二月為之  
 比礼等于時天下後人勿嘲嘆好也

右慈鎮和尚自歌吟以古寫一奉授合